

放牧を終え、厩舎に帰る馬たち。早い落日に、長い影が伸びる



ブレイメンの丘

2

「オシアンファーム」にいる十三頭の馬の中で、トバースとは限らない。普通のオシアンは一目置かれる存在だ。放牧が終わって厩舎(きゅうしや)に入る時、気性の荒い馬もトバースミオには道を譲る。最長老の二十九歳。かつて十勝もした実績が他の馬を圧倒するのだから。

この馬や妹のトバースコロネットなど四頭の持ち主は、グラシアニーさんという八十歳過ぎの米国人だ。神戸のマンションに一人で暮らし、犬や猫が話し相手の毎日。貿易商だった亡夫の遺産の中から、一頭月六万円の預託料を送ってくる。

グラシアニーさんは毎年欠かさず、馬に会いに来る。彼女は自分が死んだ後の馬のことを、とても心配しているという。「馬が生きる支えになっているのね」と、大井さんは話す。

仕送り

う心に大井さんも打たれ「頑張つて払えるようになるまでは一万円です」と約束したのだという。今、送ってくるお金は月三万円に増えた。手紙のやりとりだ。

愛馬が生きる支えに

オシアンファーム 発別市富浦の太平洋を見下ろせる丘にある。経営者で場長の大井昭子さん(六二)、町みどりさん(三三)、矢野千香子さん(三三)の女性三人が、引退した競走馬の世話をしている。馬はサラブレッドとアラブ合わせて十三頭。老馬が大半だ。

けで、面識はないが、大井さんはこれまでこぎつけたA子さんの頭張りがともうれしい。「経済的にも時間的にも、また余裕がないのしょう。愛馬に会いに来たことは一度もありません。でもどんなに会いたいか。今年はきつと来れると思います」と話す声が弾んだ。

オシアンファームの存在が知られるにつれて、応援を申し出る人も増えていくが、経営は決して楽ではない。けれど、大井さんは「馬主さんが手元においておきたくても、置いておけない馬、家族同然に思っている馬は、できる限り何とかしてやりたい」という。それが、生産牧場時代から五十年近く馬とかわつてきた自分の最後の仕事だと思ふからだ。

文・松浦 真一 記者
写真・河野 正敏 記者